

### 戦友Kの思い出



西鷹野町 牧内 進

昭和二十年七月、太平洋戦争も末期の様相を呈し、三月には東京大空襲、前後して名古屋、大阪、神戸などが空襲を受け、六月には沖繩が占領された。私もこの年の五月に招集され、千葉県市川市の部隊に入隊していた。この年は一年繰り上げの徴兵があり、大勢の若者が入隊して来た。その新兵の一人に「K君」がいた。K君とは内務班が同じで、ベッドも隣、不思議と炊事当番など、二人で組むことが多かった。空を真っ赤に染め

て日本海に沈む夕日、見渡す限り波打つ稲穂、可愛い妹の話など聞くうちに、いつしか分隊内で誰よりも気の合う戦友になっていた。

そして運命の日、七月七日、七夕の日がやってきた。その日は、朝から真夏の太陽が照りつけていた。野外で訓練するには絶好の日和だったが、今晩未明から東京湾にアメリカの空母が侵入しているとのことで、空襲警報が出されたまま過ぎた。昼近くなったところ、若い小隊長は、兵舎でじっとしているのに我慢できなかつたのか、江戸川に近い練兵場で訓練を始めた。すると突然、アメリカの戦闘機

が襲って来た。眼鏡を額の上に、上半身を乗り出して機銃を撃つ。その音と着弾の砂煙。高さ二十メートルほどのポプラの葉が空に舞う中、逃げ惑う兵士たち。蝟壺壕(筆者注・蝟壺の形をした中が広い防空壕で、空襲や戦車の攻撃に対抗するために多く使われた)手前で倒れる兵隊、まさに阿鼻叫喚の巷だった。それからどのくらい時間が過ぎたのか、平蜘蛛のように地面に伏せていたが、敵機も去ってやつと恐怖から解放された。だが隣にいた「戦友K」は、血の海の中に横たわっていた。後頭部から入った弾は、顔面を抉り



出征の日に(前列左から2人目)

私は今まで軍隊生活について、多くを語ってこなかった。時にはその体験を問われることがあっても、敢えて話そうとしなかった。それは、自分自身が少な

終戦から六十余年。まだあの機銃掃射の音、砂煙、空に舞うポプラの葉、顔のない顔で死んだKのことを夢に見ることがある。Kの冥福を祈り、戦争の悲惨さを思い、平和であることを祈るばかりである。

### 「I Say A Little Pray For You」

星ヶ丘 小松 チヒロ



「祈り」「平和」この二つの言葉を耳にする度、私の脳裏を掠めるのは、不思議といつも同じ記憶です。中学生の時に訪れた長崎原爆資料館。

#### 深い悲しみを帯びた声色

そこで目にした、ガラスケースの中のくしゃくしゃになったロザリオ。「平和」の内に生きること忘れたい生き物が、傲慢に身を委ね欲に心を売った残骸。そして、高校の修学旅行先の沖繩で講話を聴いた、元ひめゆり学徒隊の老婦人の声色。まるで天から降るような、地の底から湧きあがるような、

深い悲しみを帯びて、でも今まで聴いたどんな歌よりも力強い。生まれて初めて耳にした「祈り」の言葉。演奏会本番が始まるまでの間、手の平のまだ新しいロザリオを握りしめる時、今でも遠い記憶が鮮明に甦って来ることがあります。そして平和を祈ることへの問いかけは、いつも繰り返し返されるのです。今の私に一体何が出来るだろうか？

#### 祈りから平和が・・・

「祈り」の歌、ゴスペルを歌い続けて、気がつけば十年という月日が流れていました。節目を迎えた今、やはりゴスペルは祈りとして多くの人のもとへ届くべきだという思いは強まるばかりです。というのも、祈りから平和が生まれるということが、紛れもない事実だからです。



ゴスペルは祈り

物があふれるこの時代、何不自由ないはずなのに、私たちの目の前には多くの困難が広がっています。日々湧きあがる感情と戦う中で、平和な気持ちを保ち続けることが、どんなに難しいことであるのかを痛感させられる時があります。

激しい憤りを抑えられない時や、苦しみの余り誰かを傷つけてしまいそうな時、私はあの祈りの言葉を思い出すようにします。沖繩の老婦人があの凛とした声色で伝えてくれたのは、死をもたらした国への憎しみや恨みの念ではなく、希望を持って次世代を生きてゆける私達を祝福する気持ちでした。生きていくならばそれだけで、素晴らしく

美しい。胸を張って、貴方に生まれたことを誇りに思い、貴方という人生を生きてください。

#### 心の平和の種となる

相手を慈しみ愛する心から生まれる祈りの言葉たちが、それぞれの心の平和の種となる。あの老婦人の詩いた祈りの言葉たちが私の中で芽吹き、ゴスペルを歌う心を育ててくれているのです。憎しみに駆られれば、この平和の苗は枯れて、あのロザリオの様になってしまう。だから私も今の私にできる精一杯で歌い、祈り続けようと思うのです。

愛の木を枯らさぬように  
もうこれ以上悲しい歴史が増えぬように

この世界に生きる  
全ての人の心に  
平和の花が咲くように